

伊藤東涯の朝鮮研究と『訓蒙字会』

宮 川 康 子

[要旨] 伊藤東涯は江戸時代に思想的画期をなした伊藤仁斎の息子である。従来父の思想の祖述者とみなされてきた東涯だが、その語学研究には独自の進展が見られる。東涯に『朝鮮諺文字母』というハングル研究があることはあまり知られていない。これはおそらく日本で最も早いハングル研究であろう。本稿では東涯の朝鮮語研究に焦点をあて、その研究方法と、それがどのように『名物六帖』などの字書や、『三韓紀略』などの朝鮮研究に生かされたのかを探る。これは仁斎以来三代にわたって受け継がれていった古義堂の学問の成立の歴史を明らかにするものでもある。

1 はじめに

伊藤仁斎 (1627-1705) は江戸時代中期、日本の儒学界に大きな転機をもたらした学者である。仁斎は京都の町人の子として生まれ、周囲の反対を押し切って学問に志した。はじめ朱子学に傾倒するが、やがて精神を病み、理気二元論に立つ朱子学の形而上学を批判するに至った仁斎は、朱子学との格闘を経て、孔孟の道を直接学ぶ古義学を提唱した。

伊藤東涯 (1670-1736) はその長男として生まれ、父仁斎の学問を継承し、明治期まで続く古義堂の基盤を築いた。仁斎の『論語古義』、『孟子古義』、『語孟字義』、『童子問』などの主著は、すべて東涯によって校訂され、出版されたものである。二、三歳で字を解し、十五歳の時には『異字同訓考』を著すなど早くから俊才とうたわれた東涯は、父の学問を継承するだけでなく、歴

史的研究方法と実証に基づく新たな学問の世界を古義堂にもたらした。東涯の著作は、日本における最初の儒学思想史ともいえる『古今学変』をはじめ、現在でもその歴史的価値が高く評価されている『制度通』などの制度史、さらには『名物六帖』や『操觚字訣』などの語学書、初学者のための入門書など、その範囲は極めて多岐にわたっている。まさに当時第一級の啓蒙的エンサイクロペディストであったといつてよい。

本稿では、古義堂の学問における小学の成立過程を概観し、とくに朝鮮から伝わった『訓蒙字会』に焦点を当てて、それがどのような役割を果たしたのかを、『名物六帖』との関係および東涯、東所の朝鮮諺文研究との関係の中で検討していきたい。

2 古義堂の小学

まずはじめに古義堂の小学の特質とその淵源について概観しておきたい。

伊藤東涯には『操觚字訣』、『名物六帖』など学者必携の書と呼ばれた語学書があるが、その成立過程を詳しく調査した中村幸彦氏によれば、それは伊藤家の家学とも呼ぶべきもので、やはり伊藤仁斎にその源があるという。東涯が後に『操觚字訣』にまとめられることになる『異字同訓考』を編集したのは貞享元年（1684）から三年の間、東涯十五歳から十七歳ごろのことであるが、それ以前に仁斎は、『修辭活套』という語学書の執筆を企図していた。これは作文のための用例集ともいべきもので、第1巻：助字・字法、第2巻：虚字・異字同訓考、第3巻：雋言・字解・文勢波瀾、第4巻：熟語・用語、第5巻：文勢波瀾・行文可法と各巻の構成はできているが、各巻わずか数丁のみの草稿である。その後元禄九年（1696）に仁斎は『修辭六帖』という同様の草稿を作成しているが、こちらも未定稿のままで、『修辭活套』にあった「異字同訓考」の項目が省かれている。これらのことから考えると仁斎は、完成した東涯の『異字同訓考』を見て、その部分は東涯に託したのではないか。そればかりか、以後仁斎の語学研究的志は全面的に東涯に引き継がれていく

と考えてよいだろ⁽¹⁾う。

しかしそもそもこれらの書が編まれたのはどのような動機によるものなのか、それが古義堂の学問とどのように関わっていたのかを考えてみる必要があるだろう。第一に言えることは、それが訓詁名物の研究自体を目的としたものではなく、仁齋古義学の成立過程での学問的必要から生まれて来たということである。周知のように仁齋は「孔孟に帰れ」と説き、『論語』、『孟子』二書の「意味血脈」、「意思語脈」に通ずることを目指した。言語を異にし、千載の後に生まれた日本人にとって、それは容易なことではない。そのためには漢語漢文に習熟することが必須の条件となる。そこで古義堂では漢文学習のためのさまざまな工夫がなされた。

その一つが訳文会である。これはさまざまな種類の、時代も文体も異なる文章を選んで、まずそれを仮名交じりの書き下し文にし、つぎにその書き下し文から元の漢文を復元する（これを復文という）、そして最後にその復文と原文を比較して間違った部分を修正するという学習法である。これは古義堂のごく初期から行われ、仁齋・東涯父子も塾生たちと共に熱心にこれを行っていた。

もう一つは、仁齋やその高弟たちが中心となって各所で行われていた読書会である。そこでは『朱子語類』、『易経』、『近思録』などから、『史記』、『通鑑綱目』などの歴史書が読まれ、なかには俗語や近世の語を含む書物も含まれていた。東涯は年少とはいえそれらの読書会にも参加していた⁽²⁾。

このような学習を通じて東涯はのちに荻生徂徠と並び称される語学力を身につけるのだが、十代の東涯がその過程で書きためたノートの集積が前出の『異字同訓考』となったのであって、それは仁齋や他の高弟たちにも共有された努力の一環であったといえるだろう。それゆえそれは自らの学習のためになされたもので、始めから出版を意図していたものではない。日本にはその頃まだ『康熙字典』も伝わっていなかったし、貧しい市井の儒者である仁齋や東涯には高価な字典、類書の類を購入して手元に置くことはできなかった。

しかし古義堂の弟子達には公家や彼らと交際のある裕福な町人たちもあり、彼らや唐本を扱う本屋などから貴重書を借りるなどして、できる限りの語彙や用例を集めたものと思われる。いわば類書の原初的作業を自ら実践していたのである。

やがて東涯の『異字同訓考』は、年月を経て、その他の文体や用字に関する抄出のノートと統合合体し、時期によってさまざまに名称を変え、晩年になって『操觚字訣』の構想がまとまるのである。一方の『名物六帖』の成立についても事情は同じであって、東涯の生前にこれらが刊行されることはなかった。要するに東涯の語学研究は、仁斎古義学の基盤となる漢文力の養成過程で生まれたものであり、あくまでも「道の学問」を支えるものとしてあった。それがやがて周囲からの要請もあって後学のための手引きとしてまとめられていったのであろう。

第二の特徴は、これらの語学書が主として漢作文のための用例集であるということである。中村幸彦氏は「徂徠の『訳筌』は漢文和訳の為のものであったが、古義堂の『字訣』は、それとは逆に漢作文の為のものである⁽³⁾」という。この態度は仁斎の『童子問』の次の言葉によっても明らかである。「問う、文を作る如何。曰く、(中略)詩は之を作る固に可なり。作らざるも亦害無し。文の若きは必ず作らずんばあるべからず。言に非ざれば以て志を述ぶること無し。文に非ざれば以て道を伝うること無し。学びて文無きは、猶口有って言うこと能わざるがごとし」。そして正しい文を書くために学ぶべきものとして、司馬遷、董仲舒、劉向、班固から韓愈、柳宗元、歐陽脩などの唐宋八大家を挙げているが、注目すべきは近世の大家として方孝孺、王慎中、帰有光の名前を挙げていることである。さらに呉訥の『文章弁体』、慎蒙の『皇明文則』も挙げられている(『童子問』下巻第四十章)。

これらは皆東涯の『操觚字訣』や『名物六帖』の引用文献のなかに見られるものであり、古義堂の作文教育に使用されたものであったのだろう。同じ古学であっても、「文は秦漢、詩は盛唐」という擬古文の習得を専らとした荻

生徂徠の古文辞学とは大きく趣を異にする。仁斎は孔孟の古義を追求するとともに、そこに見出された「孔孟の道」を新たに説き出すための言語を追求していくのである。「孔孟の道」が古今を通じた普遍的道であるのと同様、その道の議論は当時の世界言語であった漢文で書かれ、世界に通ずるものでなければならないと仁斎は考えていたのである。

東涯の『操觚字訣』、『名物六帖』はこのような過程で生み出されたいわば副産物といってよいだろう。『名物六帖』は、東涯が読書の過程で抄出した語彙の集積である。そのノートが大きく膨らんだ元禄の頃から、東涯は後学のためにそれを出版することを考えたが、あくまでも「道の学問」を主とする東涯は、それは「末務」であり暇も無いとしてなかなか取り組めなかったようである。しかし享保十二年（1727、東涯五十八歳）には弟子の奥田三角の懇望と努力によって、器財箋六篇が出版される。さらに東涯の死後、宝暦5年（1708）には人品箋が、安永六年（1778）には人事箋が奥田と東涯の一子東所によって出版されるが、この二人の死後、天文、時運、地理、宮室の4篇が出版されたのは幕末の安政六年（1859）であった。この書がいかにも多くの人達に求められ、出版が待たれていたかが窺えよう。

このような地道な語彙収集の過程で、東涯はいかにして朝鮮渡来の貴重書『訓蒙字会』と出会ったのか。そしてそれは東涯の学問上にどのような役割を果たしたのかを、『名物六帖』と東涯の朝鮮研究との関連からみていきたい。

3 『訓蒙字会』と古義堂

『訓蒙字会』は周知のごとく中宗二十二年（1527）崔世珍によって著された漢字学習書である。日本に伝わった刊本は叡山文庫本、東京大学中央図書館本（東中本）、尊経閣本の三種であるが、この内、叡山文庫本のみが活字本であり、また体裁も他の刊本が各頁四行、一行四字の所謂「四字類聚」版式であるのに対して、各頁十行で漢字はただ羅列されているだけであり、李基文氏は成立が最も古い初刊本ではないかと推定されている⁽⁴⁾。比叡山延曆寺に所

蔵されているこの叡山本には、「天海蔵書」と標識があり、李基文氏が壬辰倭乱の際に日本にもたらされたとされているものであろう。

これに対して東中本と尊経閣本は木版本で、「四字類聚」版式であることなど多くの共通点があるが、目録と凡例の順序が逆になっているという違いがある。東中本には「厚狭毛利蔵」のとあり、これも壬辰倭乱の際に伝来したと考えられる。いずれにしてもこれらの刊本は大変貴重なものであり、めったに見ることのできない稀書であっただろう。それを伊藤東涯がどのようにして見ることができたのだろうか。

古義堂文庫に所蔵されている東涯の『紀聞小牘』二十九卷は、東涯の膨大な読書ノートともいうべきものであるが、その第五卷に「字会上中下三卷嘉靖六年朝鮮折衝將軍副護軍崔世珍著、乙亥之秋天台山所蔵本、借小河弘齋」とあり、『訓蒙字会』からの語彙が抄出されていることから、乙亥元禄八年(1695)に東涯が叡山文庫本を借りて読んだことはまちがいない。⁽⁵⁾小河弘齋は十五歳から伊藤仁齋に学んだ最高弟の一人小河立所の弟であり、立所が東涯を実の子のように愛おしんだことが『先哲叢談』の逸話などからわかる。⁽⁶⁾また小河家は奥州藤原家の血筋を引く名家であり、公家との繋がりも深かった。立所は元禄四年に江戸へ出るが、江戸では東叡山輪王寺の宮、公弁法親王の庇護を受けており、この公弁法親王は元禄六年に天台座主になっているから、おそらく東涯は小河弘齋を通じて叡山寺本を借りることができたのだろう。公弁法親王は東涯とほぼ同世代で、宝永六年(1709)には板行費用として金二十両を古義堂に下賜されていることから古義堂との繋がりも深かったことがわかる。

しかし現在古義堂文庫にはこの叡山本『訓蒙字会』の写本は残されていない。そのかわり東涯の息東所の手沢本として尊経閣本『訓蒙字会』の写本が残されている。これは後述する『朝鮮国諺文字母』の校訂に東所が用いたものであろう。巻末に「宝曆十二年十二月善韶読畢」と書き入れがある。はじめ私はこれを東涯の没後に新たに入手された写本ではないかと推定していたが、

伊藤東涯『初見帳』の享保十六年一月十六日条に、「桔梗屋市兵衛 訓蒙字会持参、福井氏被申入候」とあるのを発見した⁽⁷⁾。享保十六年といえば東涯は六十二歳、前年に三男東所が生まれていた。おそらくこの時の本が古義堂に遺されていたのであろう。

さらにこの古義堂所蔵の尊経閣本を写したと見られる写本が現在京都大学中央図書館に遺されている。古義堂所蔵本に比べると装丁、紙質、字体ともに優れたかなりの美本である。巻末には朱で「宝暦十二年十二月善詔読畢」とあり、また本文中に東所が施したとみられる朱の書き込みがすべてそのまま写しとられている。書写者、書写年代共に不明であるが、古義堂所蔵の尊経閣本写本であることは間違いない。

つぎに以上の経緯を踏まえて、この2種類の『訓蒙字会』写本がどのように用いられたのかを次に検討したい。

4 『訓蒙字会』と『名物六帖』

東涯によって『訓蒙字会』がまず名物の語彙収集の材料として用いられたことはまちがいない。東涯は先述した読書ノートである『紀聞小牘』に『訓蒙字会』から抄出した語彙を書き留め、さらに『応氏六帖』と題された語彙集に他の文献からの語彙とともにそれらを分類収録した。近藤尚子氏の調査によると『紀聞小牘』第五巻には『訓蒙字会』から約九十の語彙が抄出され、『応氏六帖』清水本には五十七語が収録されているという⁽⁸⁾。そしてその語彙集の最終形態が『名物六帖』であるといつてよいだろう。今回、天理大学図書館所蔵の『名物六帖』刊本および草稿の影印版を収録した古典叢書之一『名物六帖』(朋友書店、昭和54年)によってその中に引用されている『訓蒙字会』の語彙を調べたところ、表1に示した通り全体で八十四語が収録されていた。はじめに『紀聞小牘』に収録された語彙数を超えていないことから、東涯が『訓蒙字会』を読む過程で語彙と引用文の抄出を同時に進めていったこと、『応氏六帖』や『名物六帖』などの語彙集編纂はそれらのノートを元になされ、再

度『訓蒙字会』が語彙収集のために使われたことはないということが推測される。

かつて『名物六帖』全箋の引用書籍を調査された花房英樹氏は、子部 682、史部 351、集部 162、經部 122 の書名を挙げておられる。そしてこれらが「編纂の目的を以てした結果ではなく、研究途上、読書の間の覚書を整理したもので、「提示名称とその引用文は、全く同時的に採録せられた」ものであることを考えると、この「引用書籍の総計が、編者（東涯）の漢籍読書範囲の、最低の限界を示すもの」であるという。さらに「『朝鮮史略』、『三國史記』、『經国大典』、『海東諸国記』の四書は、十一を数える朝鮮書籍の一部である。その中、經部小学類の『訓蒙字会』は、同類の漢籍に劣らず利用せられている」とある。⁽⁹⁾

これらの事を考える『訓蒙字会』も語彙収集のためだけに利用されたとは考えにくい。やはり東涯の朝鮮研究の一環となる資料であったというべきだろう。

(表1)『訓蒙字会』から収録されている語彙を、日本語表記、『字会』からの引用文、『名物六帖』の分類とともに示す。ただし「平己」については『名物六帖』には記載があるが『訓蒙字会』中に見当たらない。

『訓蒙字会』 項目	『名物六帖』 収録語彙	読み仮名	註文／引用文	分類
晞	晞午	ニツチウ	正午曰一午。	天文箋
望	全昭	ジウゴヤ	一一為望。	天文箋
望	半昭	ユミハリヅキ	一一為弦。	天文箋
礁	礁	ウミノイハ	水底尖石船行所忌俗称暗一。	地理箋上
埠	埠頭	フナツキ	津頭互市處俗呼一一。	地理箋上
妓	彈的	シラヒヤウシ	俗呼作樂之妓曰一一。	人品箋二
優	把戲的	キャウゲンシ	優俗曰一一。曰雜劇。	人品箋二
農	佃戸	シタサク	農俗称一一。謂治人之田者。	人品箋二

梢	梢子	サホサシ	俗謂船上篙師為――。	人品箋三
商	貨即兒	コマモノウリ	行者曰商、俗称――。	人品箋三
賈	鋪家	ミセウリアキ ンド	坐者曰賈、俗称――、 鋪行、行家。	人品箋三
賈	鋪行	ミセウリアキ ンド	共見上	人品箋三
賈	行家	ミセウリアキ ンド	共見上	人品箋三
僮	駟僮	スワイ	僮即――、俗称牙子、 牙人。	人品箋三
僮	牙子	スワイ	共見上	人品箋三
僮	牙人	スワイ	共見上	人品箋三
妻	大娘子	オク	妻俗呼――。正娘子。	人品箋四
妾	小娘子	メカケ・ソバ メ	妾俗称――。	人品箋四
妁	媒婆	ナカフトババ	媒酌俗呼男曰媒人、女 曰――、総称中人。	人品箋四
瞽	没眼的	メシイ	瞽俗呼――。	人品箋四
盲	先士	ザトウ	盲或尊之曰――。	人品箋四
狂	風漢	モノグルイ	狂俗呼風子、又曰――。	人品箋四
奴	驅口	ツカヒモノ	吏語奴婢曰――。	人品箋五
窠	俊窠子	ウカレメ	鳥巢在穴曰窠、又俗戲 称娼妓曰――。	人品箋五
媒	媒酌	ナカタチ	見媒婆下、呼男曰媒人、 女曰媒婆、総称中人。	人品箋五
妁	中人	ナカタチ・ナ カフト	同上	人品箋五
	平巳	ダウハイ	共同上	人品箋五
墩	烟臺	ヒノミヤグラ	墩高堆也。俗呼――、 曰烟墩。	宮室箋上
墩	烟墩	ヒノミヤグラ	見上	宮室箋上
閭	街房	マチヤ	俗呼――。	宮室箋上
鋪	鋪舍	ミセ	鋪俗呼――舍、又曰――行、 ――家。	宮室箋上
鋪	鋪行	ミセ	共見上	宮室箋上

鋪	舗家	ミセ	共見上	宮室箋上
厰	厰房	フシングヤ	如工作廳、俗呼――。	宮室箋下
厰	工作廳	フシングヤ	見上	宮室箋下
厠	浄房	カワヤ	厠俗呼――。	宮室箋下
樞	門斗	クロロ	樞俗呼――。	宮室箋下
櫺	窓櫺	マドノコウシ	窓間隔木俗称――。	宮室箋下
宇	屋邊	ノキ	宇――也。	宮室箋下
厩	馬房	ウマヤ	厩俗呼――。	宮室箋下
柳	馬椿	ウマツナギ	柳俗呼――。	宮室箋下
櫪	馬槽	ウマノフネ	櫪俗呼――。	宮室箋下
棚	棚	アツチ	―射埒也。	器財箋一
銃	火銃	テッポウ	俗呼――。又曰銃筒。	器財箋一
銃	銃筒	テッポウ	見上	器財箋一
鞆	鞆	アヲリ	―障泥、俗呼鞆頭兒、又馬護衣。	器財箋一
銜	馬銜	ハミ	――俗呼嚼子。	器財箋一
銜	嚼子	ハミ	見上	器財箋一
鞭	馬鞭	ムチ	――呼鞭子、又曰挽子。	器財箋一
鞭	挽手	ムチ	見上	器財箋一
棒	棒子	ヨリボウ	棒俗呼――。	器財箋一
篙	篙	サホ	―俗呼―子。又撐子。	器財箋二
碇	碇	イカリ	碇漢人亦曰鐵猫。亦作――。	器財箋二
杵	碓髻	カラウスノキネ	杵俗称――。	器財箋二
鈔	鈔	フダツカヒ	―即楮貨。	器財箋二
鈔	楮貨	フダツカヒ	見上	器財箋二
篋	墨篋	スミサシ	篋俗呼――。	器財箋二
埶	坩鍋	ル	――燒鍊金銀器。	器財箋二
秤	等子	ハカリ	秤通作称、俗呼秤子小曰――。	器財箋二
衡	秤子	ハカリ	衡俗呼――。曰秤兒。	器財箋二
衡	秤兒	ハカリ	見上	器財箋二

鍾	鍾兒	オモリ	鍾俗呼――。	器財箋二
棒	敲棒	ヒヤウシキ	撃柝曰――。	器財箋三
影	眞影	エガタ	影俗呼影兒、又――。	器財箋三
影	喜身	エガタ	眞影曰――、又曰傳神。	器財箋三
影	傳神	エガタ	見上	器財箋三
籥	亮籥	シヨウジ	竹障俗称――。	器財箋三
炭	骨董炭	カツクイスミ	木根焼者曰――。	器財箋四
熨	運斗	ヒノシ	熨俗呼熨斗、又――。	器財箋五
篋	密篋子	スキクシ	篋俗称稀篋子、――。	器財箋五
篋	稀篋子	トキクシ	見上	器財箋五
糞	糞斗	チリトリ	糞俗呼――。	器財箋五
粥	粥	ウスカユ	稀曰－。厚曰饘。	飲膳箋
糗	乾飯屑	ホシイイ	糗――。	飲膳箋
膾	打生	サシミ	俗呼――。	飲膳箋
醅	醅醅	モロミ	俗称醅酒。酒未濾曰――。	飲膳箋
榜	掛榜	セイサツ	大曰榜、俗曰――。小曰告示、又板榜。	人事箋一
榜	告示	ハットガキ	見上	人事箋一
奪	定奪	サイキヨ	――謂裁決之意。	人事箋一
呈	呈	カキアゲ	－文帖之名。俗有咨呈、呈文之名。	人事箋三
批	批	ウラハン・オクカキ	俗呼差－。又上司以公事、題干下司文尾曰－。	人事箋三
引	引	キツテ	－文帖之名、俗称路引、塩引。	人事二
引	路引	トヲリキツテ	共見上	人事二
引	(路) 鹽引	シホキツテ	共見上	人事二

ここで『訓蒙字会』以外の書で注目しておきたいのは、『名物六帖』に引用されている朝鮮書籍の一つである『慵斎叢話』である。採録されている名辞は「女形假面」(オンナメン)で、引用文は「小梅数人著女形假面」、東涯の

按文として「小梅ハ朝鮮妓女ノ称」とある。東涯の随筆『秉燭譚』にはこの書についての記事があり、それによるとこの『慵斎叢話』も仁齋生前に小河氏によってもたらされた写本であったことがわかる。その跋に「吾座主成文公」とだけあってその名が無いことから、東涯は著者は『東文選』にある成侃のことかと推定していた。ところが享保元年の朝鮮通信使として来日した成夢良に弟梅宇を通じて尋ねたところ『叢話』の著者は成侃であり、成侃はその弟であること、しかも両人は成夢良の族祖であることが分かったというのである。

この逸話からも、東涯がいかに熱心に朝鮮書籍を収集し、その語彙を集めていたかが知られる。ちなみに『名物六帖』で引用されている朝鮮書籍について、筆者の確認できたのは、『訓蒙字会』、『東文選』、『朝鮮史略』、『三國史記』、『経国大典』、『海東諸国記』、『懲毖録』、『慵斎叢話』、『明律講解』、『攷事撮要』の十点で、あとの一点が確認できていない。これらの書籍は『朝鮮官職考』や『三韓記略』などの参考文献となったものであり、その過程で抄出された語彙が『名物六帖』にまとめられているのである。その中で収録語数が最も多いのは『訓蒙字会』であるが、これらの朝鮮書籍からの引用をすべて合わせるとかなりの量になることは間違いない。

次に東涯の朝鮮研究の中で『訓蒙字会』がどのような役割を果たしたのかを見てみよう。

5 東涯の朝鮮研究

東涯の朝鮮への関心はかなり早い時期から芽生えている。その初めは天和二年(1682)の朝鮮通信使の来朝であろう。この年の夏、仁齋は重い痲病を患っていたため、十三歳の東涯が京都へ入った通信使の一行を目にしたかどうかは明らかではない。しかし仁齋の弟子の原芸庵は、帰路の通信使と面会する機会を得て、ようやく健康を回復した仁齋に通信使への書状の代筆を頼んでいるから、通信使との唱和の様子などは聞いていただろう。年表を見ても明

らかなように、十代の東涯はその後朝鮮関係の書籍を次々に筆写している。なかでも貞享四年(1687)十八歳の時に筆写した『懲愆録』は、天和三年(1683)までに日本に刊本が渡っていたとみられるが、貝原益軒による和刻本が出るのは元禄八年(1695)のことであるから、当時は稀書であっただろう。現在古義堂にこの写本は無く、東涯がこれを筆写した経緯については明らかでは無い。⁽¹⁰⁾元禄八年の『訓蒙字会』筆写は明らかにこのような朝鮮への関心の高まりの中でなされたと考えてよいだろう。そこに周囲の理解と協力があつたことは先に見たとおりである。これらの資料を基にして三十五歳頃には『三韓紀略』、『朝鮮諺文字母』などがまとめられ、四十二歳の時には『朝鮮官職考』が刊行されるのである。

その後も朝鮮通信使の来朝の度に、東涯は熱心に史料を収集する。正徳度には、おそらく雨森芳洲を通じてであろう、通信使に供された献立表まで入手している。さらに享保度には、福山藩に出仕していた弟梅宇を通じて東涯は通信使成夢良に質問をする機会を得ている。質問は全部で7ヶ条、前述の『備斎叢話』の他、『攷事撮要』や『海東諸国記』、『懲愆録』などについての質問から、家礼についての質問、中国の文人についての情報などにわたっている。これら見ると当時東涯が朝鮮の歴史や儀礼、名辞などについて幅広い関心を抱いていたこと、また「奇書があれば謄写したい」と申し出るなど新知識を積極的に求めようとしたことがわかる。またこの問答に先立ち、成夢良は伊藤仁斎の書籍を所望し、梅宇は『童子問』を贈っている。当時仁斎の名が朝鮮にも広く伝わっていたことを示すといえよう。

もう一つ東涯の朝鮮研究にとって重要な意味をもったのは雨森芳洲との交友である。芳洲は江戸の木下順庵門に入門する前、京都にいて伊藤仁斎と直接会ったこともあり、東涯とも旧知の仲であったのだろう。江戸と対馬の往復の際に何度か東涯と面談する機会があったようである。芳洲は周知の如く朝鮮語を本格的に学んだ第一人者であり、対馬藩儒として朝鮮との外交に最も通じていた人であるから、東涯は朝鮮の事情などを芳洲から聞く事ができ

たであろう。⁽¹¹⁾しかし芳洲は対馬と江戸を往来しており、直接芳洲から朝鮮語を学ぶ機会はなかったようである。

東涯『秉燭譚』には、芳洲との会話の内容を示す次のような記述がある。壬辰倭乱の前に秀吉が朝鮮国王に宛てた書簡を副使金誠一が拒否した一件についての聞き書きである。

日本の国書に朝鮮国王殿下とするし、方物と云、来朝と云詞あり。この三事は中華より蛮国をあしらふ言葉なれば、三使のもの改めたまふべきよし願へども、更に許容なし。堺の津に空しく月日を送れり。兩使はそのままにて受け取りかへるべきよしをいへども、金誠一人うけがわず。されどもそのままにてかへるとなん。近比対州儒官雨森芳洲氏に對話せしが、このことにて三韓の人今に至て金誠一が義烈を称し、専対の才をほめりとなん。因て將軍家譜を考れば、この書簡載りたれどもかの三箇の言葉は見えず。その後五山に所伝の異国往来の書簡の案をみれば、その書簡に三箇の言葉たしかに載りてあり。雨森氏の語と果たして符合せり。家譜編集の時に改正とみえたり。世の人何にても本紙⁽¹²⁾を重宝するもことわりなり。

この対話がなされたのはおそらく東涯が『鷄林軍記』を執筆していた頃のことだろう。芳洲の話を『將軍家譜』と五山に伝わる書簡の草案によって確かめ、原典資料を確認する重要性を説くなど、ここには東涯の歴史研究がいかにかに考証学的なものであったかが示されていると言えよう。

ここで『鷄林軍記』について附言しておく、これは壬辰倭乱を、『懲毖録』を基本資料として、日本の資料としては『將軍家譜』、『朝鮮征伐史』、『清正記』、『太閤記』、中国の資料としては『武備志』、『兩朝平壤録』、『皇明実紀』、『甲乙剩言』、朝鮮の資料として『攷事撮要』など、入手できる範囲の資料に基づいて和文で記した歴史書である。その記述は伝統的な軍記物に見られる「我

が軍]、「敵軍」というような呼称ではなく、全編「朝鮮軍」、「朝鮮兵」、「日本軍」、「日本兵」という記述で統一されており、それぞれの記述資料を明記し、異説がある場合はすべて併記するなど客観的立場で史実を明らかにしようとする姿勢が貫かれている。また日本側の資料『清正記』についても、清正軍の梁山軍の戦いと南原の戦いについては、「梁山と云所は南原と方角甚違たるところなり。南海に梁山浦と云所あり。その所の水營のことにや。此は南原へ遠からず。重て可考」と言い、考証を怠らない。東涯が朝鮮の地理にも通じていたことが伺われる。⁽¹³⁾東涯の著作は、経学においても、言語においてもすべて歴史的研究方法に貫かれていることは間違いないが、史実を描く史書としての著述はこれが唯一のものであろう。その意味でも注目されるものであるが、刊行されることなく、未定稿のまま遺されている。

このような東涯の朝鮮研究は宝永元年（1704）に『三韓紀略』としてまとめられる。その目次は、君長略（三國、渤海、高麗、朝鮮）、紀号略、土地略、職品略、族望略、文籍略、方諺略となっており、未定稿ではあるが朝鮮の歴史、地理、職制、族譜、書籍、言語にわたる小百科事典ともいべきものになっている。この内職品略はのちに『朝鮮官職考』として刊行される。また文籍略には二〇三冊の書名が挙げられている。この中には先述した『名物六帖』に引用されている十冊も含まれており、それらについては詳しい説明が付記されているが、書名しか記されていないものは『慵齋叢話』、『攷事撮要』などに引かれている未見の書であろう。そして最後の方諺略の言語研究の基礎となったものが『訓蒙字会』なのである。

6 『朝鮮諺文字母』と『訓蒙字会』

『三韓紀略』がまとめられたのは宝永元年（1704）六月であるが、東涯は同じ年の十月に『朝鮮諺文字母』という墨付二十三丁の小冊子を作成している。はじめに『三韓紀略』の最後にあたる方諺略を見てみると、まず冒頭に『慵齋叢話』の諺文についての次の言葉を引用している。

慵斎叢話曰、世宗設諺文廳、命申高靈、成三問等製諺文、初終声八字、初声八字、中声十一字、其字体依梵字為之、本国及諸国語音、文字所不能記者、悉通無礙、洪武正韻諸字、亦皆以諺文書之、遂分五音而別之、曰牙舌唇齒喉、唇音有輕重之殊、舌音有正反之別、字亦有全清次清全濁不清不濁之差、雖無知婦人、無不瞭然曉之、聖人創物之智、有非凡力之所及。

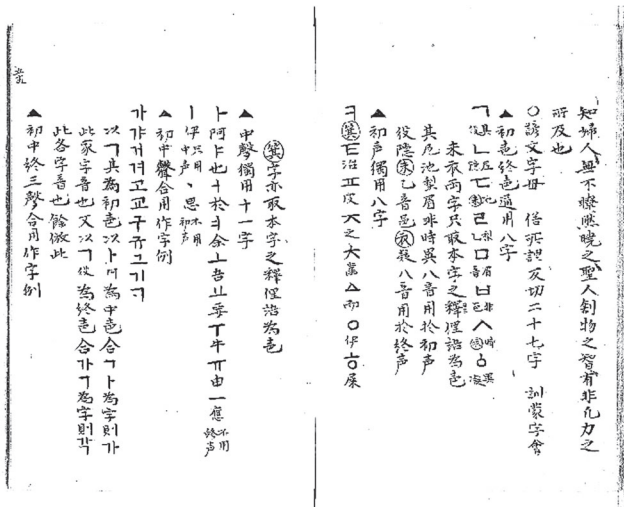
(慵斎叢話に曰く、世宗諺文廳を設け、申高靈・成三問等に命じて諺文を製す。初終声八字、初声八字、中声十一字、其の字体梵字に依りて之を為す。本国及び諸国の語音、文字の記す能わざる所の者、悉く通じて礙ること無し。洪武正韻諸字、また皆諺文を以て之を書す。遂に五音を分かちて之を別け、牙舌唇齒喉と曰う。唇音は輕重の殊なる有り、舌音は正反の別有り、字はまた全清・次清・全濁・不清・不濁の差有り。無知の婦人といえども、瞭然として之を曉らざるもの無し。聖人創物の智、有非凡力の及ぶ所に非ざるもの有り。)

そしてその次に「諺文字母 俗所謂反切二十七字 訓蒙字会」として『訓蒙字会』凡例の後にある初声終声通用八字、中声独用十一字、初中声合用作字例、初中終合用作字例以下の説明を、諺文の部分は諺文のままに写し取っているのである。ただ一箇所「釋」の字に「ヨミ」と振り仮名がつけてあるだけで一字一句違わない。(資料1)

これに対して『朝鮮諺文字母』では、初声終声通用八字、中声独用十一字、初中声合用作字例、初中終合用作字例の説明が和文で次のように書かれている。⁽¹⁴⁾(資料2)

これを見ると、説明をわかりやすくし、「日本にて江の字をえとよむがごとし」というような日本語との類比も挙げて日本の読者にもわかるような工夫がされている。さらに初中声合用作字例、初中終合用作字例は「家」と「各」の字音一例ずつでこれを簡潔に示し、以下の発音と四声の傍点についての説

(資料1) 『三韓紀略』(天理図書館蔵)



明はすべて削除されている。

おそらく東涯は、『三韓紀略』方諺略に載せた『訓蒙字会』そのままの写しでは、日本の読者の用には立たないと考えたのだろう。そこで新たに『朝鮮諺文字母』の作成にとりかかったのではないか。そして東涯はこの簡潔な説明の後に、韻書の形式にならって初声終声通用八字、中声独用十一字を終音として部立てし、それぞれに初中終合用、初中声合用の諺文の字音を項目として、その下に同音の漢字を並べたりストを作成している。『三韓紀略』のわずか四ヶ月後に作成されたこのノートは、極めて不完全なもので、部立ても初声終声通用八字のうち五字、中声独用十一字のうち九字しかないし、諺文字音項目の初声中声との組み合わせによる配列にも規則性が見られない。そして何より収録されている漢字数は僅か二八四字にすぎず、諺文字音項目の明が記されているものが大半である。

ここから考えると、東涯は漢字学習書である『訓蒙字会』を資料として、

逆に日本人が諺文を学習する際の字書を作成しようとしたのではないか。そしてここでも『名物六帖』や『操觚字訣』に見られる用例主義によって、説明を簡略化し、具体的な漢字の字音を示す方法が取られたのではないかとと思われる。東涯はこの構想によって徐々にこのノートを補充し、整理していきと考えていたのだろう。しかしはじめに述べたように、東涯の小学は、読書研究の合間に資料が集められていくという性格を持つから、この作業も決してそれ自体を目的として集中的になされたものではない。東涯はやがてこのノートを拡充整理して『三韓紀略』の方諺略に載せるつもりだったのだろう。しかし東涯の諺文研究はこれ以後進められた形跡がない。その大きな原因となったのは、翌年の宝永二年（1705）に父仁齋が没したことであろう。東涯は父の跡を継いで古義堂の当主となり、年表にあるように父の著作の校訂と出版、そして弟子達への講義に忙殺されていたと思われる。最後に『孟子古義』が出版されたのは享保五年（1720）のことであった。しかしこの間にも東涯の朝鮮への関心が薄れることはなかった。正徳四年（1714）には雨森芳洲から「朝鮮国諺文」という諺文の文字表を借りて筆写している。

そしてこの『朝鮮諺文字母』東涯草稿に校訂が加えられるのは、東涯の死後二十六年を経た宝暦十二年（1762）東涯の一子東所の手によってであった。

7 東所校訂『朝鮮国諺文字母』

天理大学古義堂文庫には東所の手になる次の三本の『朝鮮国諺文字母』が遺されている。

(a) 東涯自筆本写本。『朝鮮国諺文字母』

「宝永元年十月装釘 東涯花押」「宝暦十二年十月新謄写 善韶」

(b) 東所校訂本。『朝鮮国諺文字母 紹述雜抄卷之十四』

「宝永元年十月東涯先生創草」「宝暦十二年壬午之冬善韶補

訂]

末尾欄外「享和元年十一月二十八日校読畢」「二年十月二十五日照対畢」

(c) 東所校訂本。『朝鮮国諺文字母 新校 全』

「宝永元年十月東涯先生創草」「宝暦十二年壬午之冬善韶補訂」

「宝暦十三年癸未二月五日謄写畢」「明和丙戌之秋八月較正」

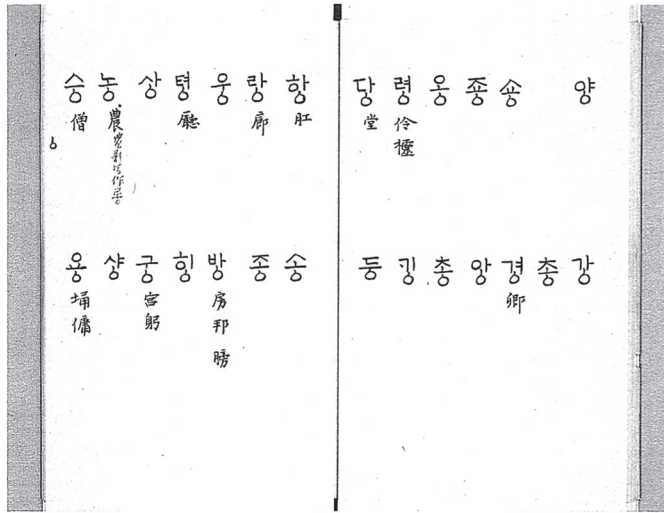
この三本の成立の過程とその内容を順を追って見ていこう。

(a) これは、東涯自筆本の忠実な謄写であるが、朱で16箇所を書入れがある。そのほとんどは諺文の誤りを訂正するものだが、その中に4箇所「新写作」「新写不見」などと記されたものがある。「新写」とは前述した「宝暦十二年(1762)十二月善韶読畢」と書き入れのある尊経閣本『訓蒙字会』の写本であろう。東所は東涯自筆本を校訂しながらこの新写本を読み進めたのである。このうち「農」字について、東所は新写本によって「畧」と訂正しているが、叡山本、東中本にはたしかに畧とあり、東所が見誤ったのであろう。古義堂尊経閣本を忠実に写した京大写本をみても、この部分は空白となっている。さらに「恃」、「宜」の二字には「新写不見」とあり、叡山文庫本にもこの二字は無い。東涯はどこからこの二字を選んだのだろうか。(b)、(c)においてもこの注記が残る続けることから、東所もその出典を確認できなかったようである。(資料3)

(b) つぎに東所は早速(a)本の補訂に着手し、諺文字音項目を補ってその配列も整理し、各字音項目の下に同音の漢字を収録していった。そして同年の冬には(b)をまとめている。その収録漢字数は(a)本の二八四字から、『訓蒙字会』とほぼ同じ三〇〇〇字以上になり、ようやく東涯の初期の構想が形を得たといってよい。

収録漢字数が飛躍的に増えただけではなく、(b)本では巻頭の諺文の説明

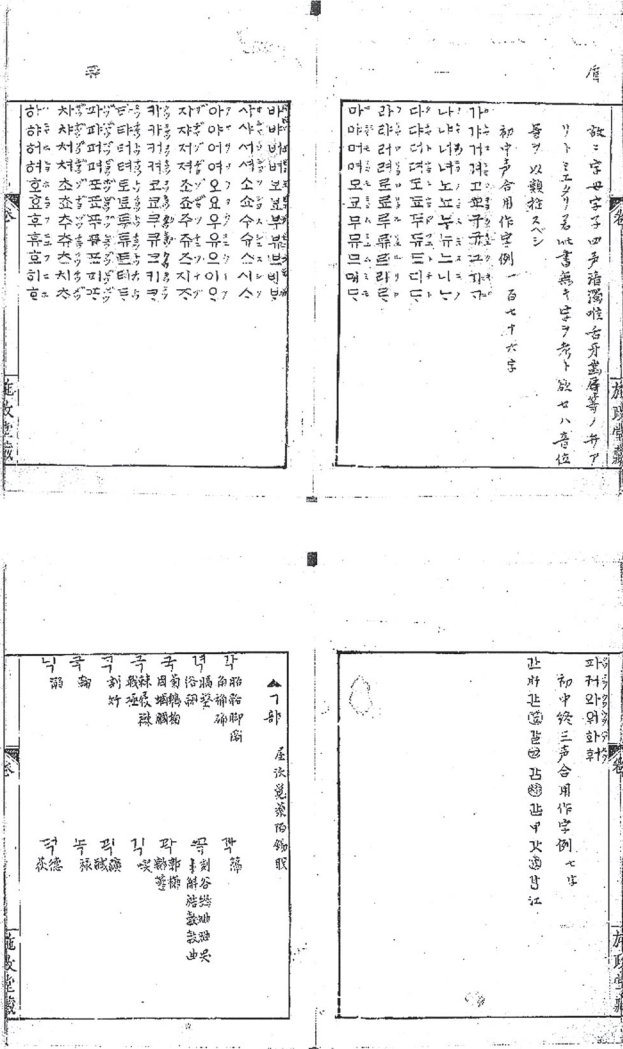
(資料3) 『朝鮮国諺文字母』 東涯自筆本写本。



部分がより丁寧に補われている。まず初中終合作字例として「婦」、四合の例として「雙」が加えられ、字音の発音の仕方が反切によって詳しく説明される。そこに「日本の音とは格別に相違するように覚ゆること多し」と書かれているのは東所の実感だったのであろう。次に東涯が省略した『訓蒙字会』にある四声の傍点のつけ方を付加したほか、前述の正徳四年（1714）に東涯が雨森芳洲から借りて筆写した「朝鮮国諺文」と初中声合作字例百七十六字の一覧表が付記されている。これは『訓蒙字会』の解説文にある「例作一百七十六字」に相当するものとして載せられているのだろう。子音を横軸に母音を縦軸に配列されたこの字音表の配列に従って東所は諺文字音項目の配列を整理したと考えられる。この表の最終行の「과」は「과」と誤記されており、当時流布した字音表の内、この誤記があるものは古義堂版『朝鮮諺文字母』を写したのと考えられる。(資料4)

ただこの (b) 本もまだ完成稿とはなっていない。欄外には漢字の追加が書

(資料4) 『朝鮮国諺文字母 紹述雜抄卷之十四』 東所校訂本。

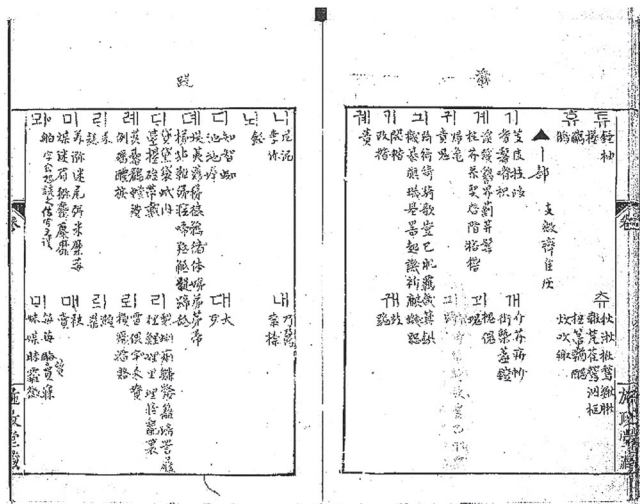


き込まれているし、配列についての訂正も見られる。なかでも注目したいのは、「訓蒙」、「字会」という書入れの他に「千文」、「千文作」として字音を示すものが3例、「日訓作」「一作」が3例有ることである。「千文」は恐らく『千字文諺解』のことだろう。古義堂文庫には『千字文諺解』は無いが、東所が『千字文諺解』を参照していた可能性は高い。「日訓」については今のところ不明である。

もう一つ挙げておきたいのは、「ㅍ」の項目に「舶」字が挙げられているのに対し、朱で「字会恐誤之伝写之誤」とされていることである。尊経閣本『訓蒙字会』および東中本の「舶」には確かに「ㅍ・ㅍ 海中大船」とあり、叡山文庫本だけが「ㅍ・ㅍ海中大船」となっている。東所はそれを「伝写之誤」としているが、これは尊経閣本の方が正しく、叡山文庫本のほうが誤っている⁽¹⁵⁾。(資料5)

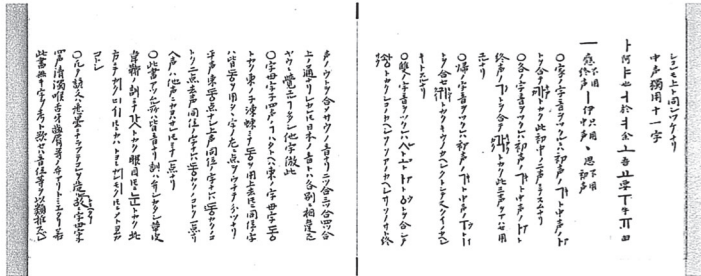
(c) これはおそらく (b) 本の浄書本であろう。(b) 本の欄外漢字および

(資料5)



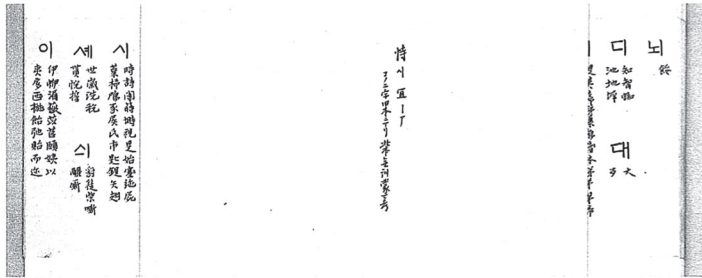
朱で訂正のあった部分もすべて含んでいる。字音項目に収録された漢字の総数は三一三九字、また装丁も立派で字体も整っており、縦 14cm、横 21cm の横長本である。東所はこれを前年からの校訂の一応の完成と考えていたのだろう。

(資料 6) 『朝鮮国諺文字母 新校 全』東所校訂本。



しかし「明和丙戌之秋八月較正」とあるように、明和三年（1766）にもう一度校訂が行われる。浄書がなってから四年後のことである。この時の訂正は漢字の誤記二箇所だけであるが、付箋をして (a) 本 (b) 本に「新写不見」と注記のあった「恃」、「宜」の二字について「この二字旧本にあり。此本無訓蒙可考」とある。「旧本」とは (a) 本 (b) 本を指しているのもであろう。この (c) の浄書本では「恃」、「宜」の二字は本文から削られているのである。(資料 7)

(資料 7)



以上古義堂文庫所蔵の東所校訂『朝鮮国諺文字母』三本の内容を見てきたが、ここで気になるのは、(b) 本の欄外に「享和元年十一月二十八日校読畢」「二年十月二十五日照對畢」とあることである。享和元年（1801）といえ、東所七十三歳、文化元年に七十五歳で没する二年前、東涯の死後六十五年目である。この年の七月には『名物六帖』の未刊部分を校訂した写本を作り、その冒頭に、この写本を元に更に校訂を進める手順、板行用の板下を作る際の留意点などが指示された付箋が付けられている。おそらく死期を悟った東所は、生前に刊行することができなかった父東涯の遺稿を後継者に託すべく、その整理に精魂を傾けたのだろう。そしてこの『朝鮮諺文字母』もその気かりの一つであったと思われる。『名物六帖』は、その後幕末の安政年間に完本が出るが、『三韓紀略』、『朝鮮諺文字母』は遂に刊行されることはなかった。

このような『朝鮮諺文字母』校訂本の成立過程を見ると、東所が父の遺業を継ぎ完成させることにかに熱心に取り組んでいたかがわかる。東所は僅

か七歳で父東涯に死に別れた。その東所の養育と古義堂の経営を任されたのは、すでに紀州藩に仕官していた東涯の末弟蘭岨である。蘭岨自身も父仁斎に十一歳で死別し東涯の薫陶の下に育ったので、遺子東所を立派に育て上げることを自らの務めとして教育にあたったのであろう。そして東涯が仁斎の遺稿の校訂刊行に尽くしたように、東所も東涯の遺稿の校訂に精力を傾けたのである。それが単なる整理ではなく、さらなる充実と完成を目指した校訂であったことは見てきた通りである。

8 『朝鮮国諺文字母』の影響

江戸時代の日本における朝鮮および朝鮮語研究といえは何といっても雨森芳洲が第一人者であった。芳洲は朝鮮語だけではなく、華音にも通じていたし、対馬には朝鮮語を学ぶ学校もあった。その朝鮮文化、風俗に関する理解の深さは古義堂の東涯とは比べものにならなかつただろう。しかし実際の政治外交に携わる立場の芳洲と、京都の町儒者であった東涯の研究態度は根本的に異なるものであつたし、その目的も自ずから違う。

啓蒙者であり教育者であった東涯の著作は、むしろ民間への知識の普及という役割を担っていたと思われる。東涯に学んだ青木昆陽の『昆陽漫録』（宝暦十三年）に、「朝鮮諺文」という一文があり、先に述べた初中声合用作字例百七十六字の一覧表を載せ、「朝鮮諺文左の如し。用い様は朝鮮諺文字母に詳らかなり」と書かれていることから、出来たばかりの東所校訂本がある程度民間に知られていたことは確かである。青木昆陽はサツマイモ栽培の普及者として有名だが、彼が古義堂で東涯に学んだ学者であることはあまり知られていない。幕府に仕官した昆陽は、徳川家旧領の古文書調査にあたり、史料を収集調査して『諸州古文書』を著し、明和四年（1739）には幕府の書物奉行となった。またオランダ語を学んで『和蘭文字略考』などの語学書も著している。これはオランダ語を七〇〇語以上集めた簡易辞書であり、ごく初歩的なものではあるが、このような昆陽の史料収集、語彙収集の方法は、やは

り古義堂で培われたものであろう。昆陽が『朝鮮国諺文字母』に関心を寄せたのも当然であるといえる。

本格的な写本調査は行っていないが、管見の限りでは、『朝鮮国諺文字母』の写本は、国会図書館、関西大学図書館、京都大学附属図書館所蔵の三本がある。『三韓紀略』写本については東京大学三本、筑波大学二本、京都大学、立命館大学、鹿児島大学、高知県立図書館にそれぞれ一本が確認できる。また韓国延世大学にも一本が所蔵されていることから、写本としてかなり流布していたと考えてよいだろう。貝原益軒によって刊行された『懲愆録』和刻本にも、東涯の『秉燭譚』にある朝鮮関係記事が書き込まれているものが四点確認されており、当時の読者が朝鮮に関する情報を古義堂に求めていたことがわかる。⁽¹⁶⁾東所⁽¹⁶⁾の刊行への努力はこのような読者たちの要望に応えるものでもあっただろう。

9 おわりに

『訓蒙字会』写本が『名物六帖』、『朝鮮国諺文字母』の成立にどのように関わっていたかを見ていくと、古義堂の学問の基盤と方法がよく理解できる。伊藤仁斎は日本の儒学を朱子学的思考の枠組みから解放したまさに革新的な思想家であるが、それが正確な言葉の理解と自らの思想を言語化する作文力の習得という言語研究の上に成し遂げられていることが重要であろう。そこにはすでに文献、文体、語彙などを歴史的に分析する視点がある。しかしあくまでも朱子の註釈を離れて孔孟の道を追求しようとする仁斎においては、このような言語研究は学問的方法論としては自覚されてはいなかっただろう。

東涯は仁斎の思想的革命が新たに開いた地平の中で、その学問方法を、歴史的、考証学的なものとして発展させていったといえるのではないか。東涯は仁斎の思想を祖述し、広めていくことに全力を注いだ。そして自身の道の学問の総集成として『古今学変』を遺した。それがどのように広い学問的土台を持つものであったかは、その副産物として生まれた小学類の著作の成立

過程によってみるることができるだろう。さらにそれらは蘭嶋、東所や古義堂の弟子達によって引き継がれていったのである。

注

- (1) 中村幸彦「操觚字訣の成立」(中村幸彦全集第11巻、中央公論舎、昭和57年) 参照
- (2) これらの輪読会については当時の公家の日記の中にも記されており、また東涯は家庭教師として公家たちの家で史書などを講読することもあった。これについては拙論「近世公家知識人の歴史意識—野宮定基卿記覚書(3)—」(京都産業大学日本文化研究所紀要第7.8合併号、2003)参照。
- (3) 中村幸彦前掲論文
- (4) 李基文『訓蒙字会』解題(『東洋学叢書』第一輯、檀大出版部、1971)
- (5) 中村幸彦「名物六帖の成立と刊行」(中村幸彦全集第11巻、中央公論舎、昭和57年)参照
- (6) 『先哲叢談後編1』(国史研究会蔵版、1916、p51)
- (7) 山根陸宏・岸本真実「伊藤東涯『初見帳』(五)」(『ビブリア』)
- (8) 近藤尚子「成長するテキスト『応氏六帖』」(文化女子大学紀要、人文・社会科学研究3、1995)。私が見たかぎりでは、『紀聞小牘』第五巻には、『訓蒙字会』の項目92が抄出されている。
- (9) 花房英樹「名物六帖の引用書籍について」『東方学報』京都第16冊、昭和23年
- (10) 一ノ瀬千恵子「文禄・慶長の役の伝承に関する日朝比較研究」(富士ゼロックス小林節太郎記念基金、2007)によると内閣文庫に「貞享歳次丁卯季夏 伊藤長胤謹序」、「寛政九年山科貞松院七十七歳改之」と識語のある朝鮮二巻本の写本がある。
- (11) 中村幸彦「雨森芳洲とその交友」(中村幸彦全集第11巻)参照
- (12) 『秉燭譚』巻之一「天正韓使の事」ただし『鷄林軍記』には三つの言葉が「閣下」、「方物」、「本朝」とあり、『秉燭譚』とは異なっている。現代の研究書を見ても「本朝」、「来朝」、「入朝」と記すものなど様々である。
- (13) 『三韓紀略』地理略には、朝鮮八道の地図が掲載されている。
- (14) 伊藤東涯自筆本『朝鮮諺文字母』(天理大学古義堂文庫所蔵)
- (15) 2017年度ソウル大学奎章閣韓国学研究院学術大会「経学史の視野から見た小学類文献」において発表した際、権仁瀚教授から「活字本には誤記が多く生ずるので、後から出た木版本の方が正しい。これは東所の誤解であって、叡山本の方が間違っている」と御教授を受けた。謝意を表したい。
- (16) 一ノ瀬千重子、前掲論文。

年号	西暦	歳	古義堂関係事項	東涯著作	朝鮮関係事項	その他
延宝7	1679	10	東涯、疱瘡見舞に勘解由小路韶光から元政著『扶桑隠逸伝』を贈られる。			
天和3	1683	14	父仁齋と共に立太子節会に参内 二月はじめて『詩経』を講義する。			
貞享1	1684	15		『異字同訓考』を作る		
貞享2	1685	16		『贈道香上人序』、『左伝纂』を作る		
貞享3	1686	17		『助字考略』を作る	「朝鮮壊墜之図」(羅念庵「廣輿図」)を写す	
貞享4	1687	18			柳成龍『懲忿録』筆写	
元禄1	1688	19		元陳繹会撰『文章欧治』を校刊		
				『宋元通鑑刪補』を作る		
元禄2	1689	20		『皇唐流内官品之図』を校刊	『海東諸国記』筆写	雨森芳洲、対馬へ仕官
元禄3	1690	21	父仁齋と撰津に遊ぶ。(『撰行録』)		『経国大典』筆写	
				『授幼文規』に序す。		
				『西京雜記』刊行		
				『皇明流内官品之図』を作る		
元禄7	1694	25		『左氏熟語』を作る。		
				『歴代官制沿革図補』成る。		
元禄8	1695	26			『訓蒙字会』を筆写	西川如見『華夷通商考』、貝原益軒序『懲忿録』刊行
元禄9	1696	27	仁齋古稀の賀、江州水口に滞在			
元禄11	1699	30	仁齋、江州水口に滞在			
元禄13	1700	31		宋呂祖謙撰『改正東萊博議』を校刊		
元禄14	1701	32	四月、前漢書会始まる(元禄15年12月まで)			契沖没
元禄16	1703	34	『童子問』講義(仁齋)始まる(翌九月まで)			徂徠仁齋に書簡を送る
宝永1	1704	35	『孟子』講義始まる		『朝鮮国諺文字母二十七字』を作る	『交隣須知』この頃成立か

					『三韓記略』に序す	
			仁齋生前最終稿本成る			
宝永2	1705	36	仁齋没	『語孟字義』刊行		
			七月東涯『孟子』講義を再開、			
宝永3	1706	37	仁齋墓碑建立、『語孟字義』開講(享保18年まで)			この頃、雨森芳洲、東涯と相識
宝永4	1707	38		『童子問』刊行、「古学先生行状」刊		
宝永5	1708	39	『童子問』開講(享保19年まで)			京都大火
宝永6	1709	40	公弁法親王(東叡山宮)から板行費用二十両を贈られる	『通書管見』に序す	雨森芳洲東涯と詩の贈答	新井白石登用
宝永7	1710	41			『倭韓通信襟誌・朝鮮襟誌』(正徳2頃まで)	
正徳1	1711	42			『朝鮮官職考』	正徳度朝鮮通信使来朝。徂徠、護園を開く
正徳2	1712	43		『論語古義』刊行		
正徳3	1713	44	『論語古義』開講(享保16年まで)			
正徳4	1714	45		『大学定本』、『中庸發揮』刊行 『名物六帖』に序す	『朝鮮国諺文』(雨森芳洲所伝)筆写、『正徳元年辛卯朝鮮人来聘之次第』、『朝鮮人来聘御料理献立』、『正徳辛卯韓使贈答詩卷臨本』、『韓客筆話』などもこの頃筆写か	徂徠、『護園隨筆』
正徳5	1715	46	『中庸發揮』開講(享保16年まで) 『大学定本』開講(享保21年まで)			
享保1	1716	47		明黄克典等編『芸林伐山故事』刊行		新井白石罷免
享保2	1717	48	仁齋十三回忌	『古学先生文集』、『古学先生詩集』刊行		新井白石『東雅』
				『訓幼字義』に序す		
享保3	1718	49		『古今学変』起稿		
享保4	1719	50	仁齋三男梅宇、朝鮮通信使成夢良に『童子問』を贈る	『古学指要』刊行	『朝鮮八道図』(享保中福山来)、『享保四年韓使次第』、『韓客唱和』もこの頃か	享保度朝鮮通信使来朝
享保5	1720	51		『孟子古義』刊行	『朝鮮国絵図』(对州青柳元春来)	『大日本史』幕府に献呈
						『康熙字典』渡来

享保6	1721	52	『孟子古義』開講(享保18年まで)		『朝鮮柳西厓復佐々木大膳書』を写す	
享保9	1724	55		『中庸發揮標釈』成る		
				『制度通』に序す		
享保11	1726	57			『朝鮮国より罷帰候能代者口上書』を写す	
享保12	1727	58		『名物六帖』器材箋刊(以後安政6年まで刊行が続く)		『徂徠先生答問書』
				平野含翠堂、八尾環山楼訪問		
享保14	1729	60	古義堂改築	『周易経翼通解』浄書本成る		雨森芳洲『全一道人』
			靈元法王より褒美銀二枚拝領	『秉燭譚』に序す		石田梅巖、車屋町で講義をはじめ
享保15	1730	61	伊勢に遊ぶ。三男善留(東所)生まれる	『鄒魯大旨』、『復性弁』刊		本居宣長生まれる
				『学問關鍵』成る。『聖語述』補修成る		
享保16	1732	62	堺、貝塚、府中に遊ぶ			蘭嶋、和歌山藩に仕官
享保18	1733	64	大阪懐徳堂、平野含翠堂訪問	『大学定本釈義』浄書本成る		雨森芳洲、東涯に自著『たはれくさ』の校訂を依頼
享保19	1734	65		『弁疑録』、『経学文衡』、『新刊校正用字格』刊行		
享保20	1735	66		『古今学変』草稿を校正		
				『古今教法沿革図』刊		
元文1	1736	67	7月17日東涯没	『唐官抄』に序す。『釈親考』刊行。		
				『経史博論』浄書本成る。		

